

日本英文学会 中国四国支部 第 75 回大会 プログラム・梗概

会期：2023 年 10 月 28 日（土）、29（日）

会場：島根大学 松江キャンパス
〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東 6 - 13 - 1
安田女子大学文学部英語英米文学科 田多良俊樹研究室内
TEL 080-3701-0547

第一日 10月28日(土) (参加受付 12:30ー)

開会式・総会 (12:45-13:15 教養講義室棟2号館2階 504教室)

	(司会) 島根県立大学教授	松 浦 雄 二
開会の辞	日本英文学会中国四国支部支部長	太 田 聡
挨拶	島根大学法文学部長	丸 橋 充 拓
総 会		

研究発表 (13:30-15:40)

第1発表 13:30-14:10 第2発表 14:15-14:55 第3発表 15:00-15:40

第1室(教養講義室棟2号館1階 401教室)

	(司会) 広島大学教授	今 林 修
1. <i>Anne of Green Gables</i> における red hair が伝える意味	徳島大学大学院博士前期課程	中 畑 明 理
2. <i>The Canterbury Tales</i> に見られる認識表現について	広島大学大学院博士課程後期	木 村 典 政
	(司会) 広島大学教授	大 野 英 志
3. (招待発表) Naples 写本で <i>Lybeaus Desconus</i> を読む	三重大学名誉教授	西 村 秀 夫

第2室(教養講義室棟2号館1階 404教室)

	(司会) 島根大学名誉教授	渡 部 知 美
1. 〈震災後〉という文脈とラフカディオ・ハーン—霊性の文学の再評価に向けて—	島根大学講師	宮 澤 文 雄
2. ラフカディオ・ハーンのシェイクスピア論と日本のシェイクスピア受容	島根県立大学教授	松 浦 雄 二
	(司会) 県立広島大学名誉教授	高 橋 渡
3. “The Tale” における信念と懐疑	就実大学教授	渡 辺 浩

第3室（教養講義室棟2号館2階 501教室）

（司会）島根県立大学短期大学部教授 藤吉知美

1. トニ・モリスンの『ビラヴィッド』とコルソン・ホワイトヘッドの『地下鉄道』
——ネオ・スレイヴ・ナラティブとBLMの関係性
広島大学大学院博士課程前期 道本美波
2. 預言者と天使の関係性の崩壊—*Angels in America* ロンドン上演（2017）考察
広島工業大学准教授 住田光子
3. Carver の短編 “A Small, Good Thing” におけるパストラルの理想：
パンとポテチとペアレンティングをめぐって
県立広島大学准教授 栗原武士

第4室（教養講義室棟2号館2階 503教室）

（司会）広島大学教授 小野章

1. 自分の意見や考えを書く能力の育成—英語詩を教材として
広島大学大学院博士課程前期 形山羽奈
2. アンチレイシストを自認する英語教育研究者が自らのポジショナリティを記述すること
大島商船高等専門学校助教 中原瑞公
3. 英語教育と小泉八雲
四国学院大学教授 菅田浩一

特別講演（16:00-17:30 教養講義室棟2号館2階 504教室）

（司会）山口大学教授 太田聡

導入 ヒトの言語と脳のはなし

山口大学教授 太田聡

演題 脳科学と言語学から見た「文」学：言語脳科学への誘い

講師 九州大学准教授 太田真理

懇親会（18:30-21:00）

会場 松江エクセルホテル東急

会費 6,800円

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。

第二日 10月29日(日)

シンポジウム (10:00-13:00 教養講義室棟2号館2階 504教室)

題目 英文学と音楽／音楽性

イギリス中世・初期近代演劇が音楽に求めたもの—シェイクスピアの事例を中心に

(講師) 熊本大学准教授 富村 憲貴

「曖昧過ぎる正解も譜面にして」—ドライデンの頌歌(オード)について

(司会・講師) 広島大学教授 吉中 孝志

さらに歌い継がれるキーツの「つれなき美女」—合唱曲に翻案された事例とその意義

(講師) 茨城大学教授 小林 英美

ジェイムズ・ジョイス—音楽としての言葉、言葉としての音楽

(講師) 愛知教育大学教授 道木 一弘

閉会式 (13:00- 教養講義室棟2号館2階 504教室)

(司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長

田多良 俊 樹

閉会の辞

日本英文学会中国四国支部副支部長

小 野 章

第一日

— 研 究 発 表 —

Anne of Green Gables における red hair が伝える意味

徳島大学大学院博士前期課程 なかはた あかり 中畑 明理

L. M. Montgomery による *Anne of Green Gables* は、主人公アンの髪の色である red、アンたちが住む場所である Green Gables の green、親友ダイアナの髪や目などの black と、色彩語が多用されている。このことは、本作品において色彩語が重要な役割を持つことを示している。一方で、本作品に関するこれまでの研究では、アンの孤児という背景や言動特性から、ジェンダー論、フェミニズム、発達心理学といった立場での研究が多いものの、色彩に着目した研究では、赤毛の理由や風景描写の技法に注目した研究にとどまっている。

本発表では、*Anne of Green Gables* に用いられている色彩語 red に注目し、red hair が伝える意味について考察する。red についてエジプト神話では、悪の力の化身とされるセト神の色であり、西洋では他の色を凌駕し、血や火と結びついて生命の色として認識されるものでもある。red hair について中世末から近代では、人々に呪いをかけ惑わす魔女の髪の色と考えられてきたことなどがあり、red hair の人物は気性の荒さなどと結びつき肯定的な意味を伝えにくいと考えられる。本作品においても、red hair はアンのコンプレックスであり、周囲からも赤毛であることは癪癢持ちや異質な存在として扱われている。

本作品における red を含む文のうち、約 61% が red hair を示す表現であり、赤毛が伝える意味を強調していることも踏まえ、定量的な観点や歴史・文化的な背景を検討し、色彩語 red が伝える意味を red hair は内包しつつ、新しい意味を伝えていることを指摘する。

The Canterbury Tales に見られる認識表現について

広島大学大学院博士課程後期 きむら のりまさ 木村 典政

本研究発表は、中期英語の作品に広く見られる、「確かに」「本当のことを言えば」など、命題に対する真偽性を表す認識表現 epistemic expressions (*certainly, soothly, truly* などの副詞、*out of dread, without doubt* などの前置詞句、*(as) I guess* などの comment clause、さらに *sooth to say* などの独立不定詞) について、Geoffrey Chaucer の作品、特に *The Canterbury Tales (CT)* に焦点をあて、その特徴について考察することを目的としている。これらの表現については、これまで多くの研究が行われてきた。代表的な先行研究としては、CT や *Troilus and Criseyde* に見られる *(as) I guess, (as) I trowe, I woot* などの comment clause に焦点を当てたものとして Brinton (1996, 2017)、*soothly* や *truly* などの副詞に焦点を当てたものとして中尾(2011)、*sooth to say* などの独立不定詞に焦点を当てたものとして大野(2015)などが挙げられる。今回の発表では、これらの先行研究を踏まえ、統語論的な観点(脚韻の割合や共起する命題内容の法など)、および語用論的な観点(それぞれの Tale の語り手、原典となった作品との関係など)から分析を行う。そして、適宜 John Gower の *Confessio Amantis* などの同時代に書かれた作品と比較しながら、主に *The Man of Law's*

Tale などに焦点をあて、これらの表現が作品の中でどのような役割を果たしているか、ということについて考察したい。

Naples 写本で *Lybeaus Desconus* を読む

三重大大学名誉教授 にしむら ひでお 西村 秀夫

「トパス卿の話」が第3節に入っすぐ、*Horn Child*, *Bevis*, *Guy* ら *Auchinleck* 写本に含まれるロマンスの主人公たちと並んで名前が挙がる *Lybeux* もまたロマンスの主人公である。*Gawain* の私生児として生まれた若者が、自分の名前を知らぬまま騎士に叙されることを願って *Arthur* 王の宮廷に赴く。願いは聞き届けられるとともに、*Arthur* から‘*The Fair Unknown*’を意味する *Lybeaus Desconus* という名前を与えられる。数々の試練を経て、囚われの身となっていた *Lady of Synadoun* を救出し、彼女と結婚することで騎士として完成するという *Lybeaus Desconus* の物語は人気を博したようで、15世紀の5写本(*Lincoln's Inn*, *Naples*, *Cotton Caligula*, *Lambeth Palace*, *Ashmole*)および17世紀の1写本(*Percy Folio*)で今日に伝わる。

不完全な *Lincoln's Inn* を除く15世紀の4写本では、EETS にパラレルテキストとして収録された *Cotton Caligula*, *Lambeth Palace*, 写字生 *Rate* が編集した *Ashmole* に比べ、*Naples* の影が薄い。本発表では *Naples* を中心に据え、他の写本と対照しながら、登場人物の造形、語彙、脚韻語、定型表現などの観点からこの写本の特徴を探る。

〈震災後〉という文脈とラフカディオ・ハーン — 霊性の文学の再評価に向けて —

みやざわ ふみお 島根大学講師 宮澤 文雄

Lafcadio Hearn／小泉八雲(1850-1904)が、生涯を通じて様々な形で自然災害とかかわってきたことはあまり知られていない。アメリカ時代にはハリケーンによって壊滅した島の唯一の生き残りの少女を主人公とする *Chita* (1889) を執筆し、またマルティニーク時代に親しんだプレー山が大噴火を起こしサン・ピエールの町が被災すると追悼文を記すなど、自然災害に敏感な作家だったことが確認できる。それは災害大国である日本時代に入るとより顕著になり、友人に宛てた手紙のなかで地震に対する恐怖を吐露したり、地震や津波に直接言及したエッセイや再話を執筆したりするようになる。このように自然災害に対する *Hearn* の関心自体は疑いようがないと思われる。本発表はその点を踏まえて、東日本大震災という現代の文脈から *Hearn* 作品の再読を試みる。とくに震災が描かれていないような作品を震災遺族を新たな地平に導く物語として誤読し、さらに *Kwaidan* (1904) に代表される霊性の文学に *Hearn* と東日本大震災の距離を確認することによって、〈震災後〉という時代における *Hearn* の位置を探ってみたい。

ラフカディオ・ハーンのシェイクスピア論と日本のシェイクスピア受容

島根県立大学教授 まつうら ゆうじ 松浦 雄二

坪内逍遙らがシェイクスピアの翻訳・出版を始めた約20年後の明治36(1903)年2月、海外興行より凱旋帰国した川上音二郎・貞奴一座が、開場30年を迎えた明治座で『翻案 オセロ六幕』を初演し、その後も翻案劇『ハムレット』を立て続けに発表して、興行的な大成功を収めた。またその3年後の明治39(1906)年には、逍遙の主宰する前期文芸協会が活動を開始し、歌舞伎座で『ヴェニスの商人』の法廷場面が試演され、その翌年明治40(1907)年には翻案ではない本格的な翻訳による『ハムレット』全編が本郷座で初演された。以後、シェイクスピアは「翻訳による上演が常態となった」(安西徹雄 1989)。

一方、川上一座が翻案『オセロ』の初演を打つおよそひと月前、東京帝国大学講師であった Lafcadio Hearn の元には講師の契約更新は不可能である旨の通知が郵送されていた。学生たちはこのことを知り強硬な抗議運動でハーンの続投を大学側に働きかけたが、結局ハーンは帝国大学を、そして翌年にはこの世からも去ってしまった。本発表では、Bardolatry を文化的社会的背景の一隅に映すヴィクトリア朝の英国の人であるハーンが、英文学史の講義を通してシェイクスピアについて語り、去っていく時期と、シェイクスピアがわが国での翻訳出版とともに舞台上にも受け入れられていく時期とが重なることがわが国のシェイクスピア受容に一定の影響があるのではないかと、当時の学生たちを中心としたいわば Hearnolatry というべき現象を併せ鑑みながら検証してみたい。

“The Tale” における信念と懐疑

わたなべ ひろし 就実大学教授 渡辺 浩

コンラッドの短編 “The Tale” は、物語の背景と内容が不可思議な作品である。身元がはっきりとしない男女が、ある室内で女性の求めに応じて男性が思い出話を語るという設定である。話の概要は、第一次大戦開始後間もない時期に、巡視の任務を帯びた男性本人と思われる士官が、濃霧の中、入り江に停泊中の貨物船を発見し、敵潜水艦に補給をして利益を得ている中立国の船ではと疑いをかける。相手方の北欧人である船長は、違法行為はしていない旨を説明するが、士官は疑いを深め、わざと座礁の可能性のある航路を示して強制的に入り江から退去させる。もし違法の補給活動をしている船ならば、海岸線の地理は熟知しており、事故に遭うことはなかろうと予想した判断であったが、意外にも貨物船は座礁し、乗組員ともども沈没する。

事件の話以外は全て不明瞭な設定で、文字通り霧に包まれたような内容となっている。その真意はしばしば議論的的ともなっているが、要点は信念に基く行為が船の遭難に繋がり多くの命を奪い、主人公が深い後悔の念を抱いていることである。使命感に基く信念といえども絶対ではなく、間違いを犯すこともあり、信念や価値観に対して大きな懐疑が投げかけられていることは確かである。また戦争という行為に絡んだ残虐な結果や人命の軽視という部分にも批判の目が向けられている。この作品に関して明確な部分から作品に込められた真意を探ることにする。

トニ・モリスンの『ビラヴィド』とコルソン・ホワイトヘッドの『地下鉄道』 ——ネオ・スレイヴ・ナラティヴと BLM の関係性

広島大学大学院博士課程前期 みちもと みなみ
道本 美波

ネオ・スレイヴ・ナラティヴは、現代の黒人が過去を想像することによって奴隷の人間性を取り戻すことを目的にしている。対して、BLM は、警察による黒人暴力の阻止や社会的に最も弱い立場に置かれている人々を受け入れ、彼らに安心して自分でいられる社会的空間と言説の創出を目指す。トニ・モリスンによる『ビラヴィド』やコルソン・ホワイトヘッドによる『地下鉄道』はどちらもネオ・スレイヴ・ナラティヴに分類されるが、これらの作品は、執筆された時代背景によってそれぞれの作家が読者に伝えたいものが異なる。『ビラヴィド』は、歴史の回復を目的として、マジック・リアリズムの手法で登場人物を通して読者に奴隷制の悲惨さを語り、黒人に個人的かつ民族的な癒しとアイデンティティの獲得をもたらす。一方、『地下鉄道』は、BLM の精神に則ってアメリカの歴史を問うことを目的とし、本来矛盾するはずの SF とリアリズムを融合させて現代アメリカ社会を風刺する。読者は、俯瞰的な視点でアメリカの歴史を見ることがアメリカが社会構造的差別によって成り立つことを理解するのだ。本発表では、いずれも黒人文学の発展に大いに寄与したモリスンとホワイトヘッドが、作品を通じて、人種主義とはなにか、さらには人間とはなにかをそれぞれのやり方で問うていることを論じたい。

預言者と天使の関係性の崩壊—*Angels in America* ロンドン上演 (2017) 考察

広島工業大学准教授 すみだ みつこ
住田 光子

古くから疫病 (plague) は集団を襲う災難、悪、天罰として隠喩的に使われ、流行病 (epidemic) のエイズにもそうした側面があることをスーザン・ソントグは見出してきた。本発表で扱うトニー・クシュナーの *Angels in America* では、上演のなかで必ず意識されてきた天使の構図がある。そのひとつがラファエロの絵画「キリストの変容」である。少年の発作 (病) に慌てるひとびとの頭上に、両手を広げ羽ばたくキリスト (天使) がいる。墮落した人間に対して神の超越が示されていると言われる。こうした劇の複数の素材のなかで、人類が成し遂げている進歩は皮肉にも荒廃や墮落につながるものとして解釈され、その救済者としての天使のイメージリーがあった。

2017 年英国ナショナル・シアターのマリアンヌ・エリオット演出では、従来の健康な (女性の姿の) 「美しい白い天使」は一新され、咳をする「憔悴した灰色の天使」へと変わる。クシュナーの劇ではエイズはペストと同じように疫病として言及されるが、性的マイノリティの多様性ゆえに、1985 年人類の進歩の代償として病が蔓延する構図は問題を含んでいる。本発表では、まず劇テキストからエイズ・パンデミックによるひとびとの価値の転倒を読み直す。その上で預言者 (人間) と天使の関係性の崩壊に着目し、天罰としてのエイズという視点から、天使と格闘し「拒む人間」の演出 (2017) を考える。

Carver の短編 “A Small, Good Thing” におけるパストラルの理想：
パンとポテチとペアレンティングをめぐって

県立広島大学准教授 くりはら たけし 栗原 武士

本発表では作品中に描かれる食のイメージに着目しつつ、Raymond Carver の代表作の一つである “A Small, Good Thing” の再評価を試みたい。従来の Carver 研究において、本作品の結末でパン屋によって主人公夫婦に提供されるパンはしばしば比喩的な聖餐—つまり作品の主題を宗教的な文脈に位置付ける文学的装置—として論じられてきた。その一方、作品冒頭で、主人公夫婦の息子がポテトチップスを頬張りながら小学校に登校するシーンは、これまで不当に見過ごされてきたように思われる。彼の作品群の一般的な傾向として、ポテトチップスに代表される加工食品やジャンクフードにはしばしばネガティブなイメージが投影されていることを鑑みると、このポテトチップスの描写を詳細に分析することで、エンディングのパンの解釈と作品全体の構造分析に、新たな論点を加えることができるのではないだろうか。本発表では、Christina Bieber Lake の 2011 年の論考 “Technology, Contingency and Grace: Raymond Carver’s ‘A Small, Good Thing’” に依拠しつつ、ポテトチップスを食べる息子の描写を現存する 3 つのバージョン間で比較することで、宗教的な文脈のみには収まらない本作の社会批評性を考察する。この考察を通して、子供への愛憎入り混じった感情をしばしば吐露した Carver が、本作ではパストラルな生活様式の中に理想的なペアレンティングのありかたを描き出そうとしていることを指摘したい。

自分の意見や考えを書く能力の育成
—英語詩を教材として

広島大学大学院博士課程前期 かたやま はな 形山 羽奈

2018 年に経済協力開発機構 (OECD) が発表した国際的な学習到達度調査 (PISA) によると、日本の 15 歳は「あなたの意見を書きなさい」という自由記述式の解答において無記述、無回答が目立つ課題があるとされている。文部科学省は環境問題や少子高齢化問題などの社会的な話題について自分の意見を述べられるよう求めている。しかしそのためには背景知識が必要であり、授業での実践が易しくはない。一方、文学は「あなたの意見」を述べやすく、実践練習の題材として適していると考ええる。また、中でも英語詩は比較的短い文で構成されており、授業で扱いやすい。本研究では、学習者に英語詩に対する「あなたの意見」を自由に述べさせ、英語詩が自分の意見を論じる題材として適切であることを検証する。学習者が「英語詩に対して自分の意見を述べること」に対してどう感じるかについても調査する。

アンチレイシストを自認する英語教育研究者が 自らのポジショナリティを記述すること

大島商船高等専門学校助教 なかほら みずき
中原 瑞公

私は、「英語教育におけるアンチレイシスト教育の展開」を現在の研究テーマとしている。「英語教育は実社会のレイシズム解消にどのように貢献できるか」という問題意識をもって研究に取り組んでいる。

研究を進めるにつれてふたつの感覚が私のなかに生じている。ひとつは研究者としての自己有用感である。日本の英語教育研究においてアンチレイシスト教育に取り組む研究者は多くなく、私は自らの研究に誇りをもっている。また、研究を通してアンチレイシズムを実践し、アンチレイシストとして成長していることに喜びを感じている。もうひとつの感覚は、研究を進める自らのポジショナリティ（立場性）についての違和感である。「私はどの立場からアンチレイシスト教育についての研究を進めているのか」という問いが私をがんじがらめにしている。

本発表では、オートエスノグラフィー（研究者自身の経験についての再帰的なエスノグラフィー）の手法を用い、研究する〈私〉のポジショナリティを記述することをめざす。まず、かつてレイシストであった私がどのようにアンチレイシストとなったのかをふりかえる。次に、「日本人」としての特権や日本社会におけるレイシズムへの共犯性という観点を交えながら、アンチレイシストとしての〈私〉のポジショナリティを問い直す。結論部では、英語教育研究者（英語教師）が自らのポジショナリティを記述することの意義について述べる。

英語教育と小泉八雲

四国学院大学教授 すがた こういち
菅田 浩一

言語教育の意義はリスニングやスピーキングなど、その言語の実用的な能力を養成することだけでなく、言語を構築する文化的背景を学ぶこと、つまり「今までとは全く異なった分析やカテゴリー化の新しい視点を獲得すること」（丸山圭三郎）にある。小泉八雲の英語は語彙や文法が比較的簡単な simple text で、授業の進め方や解説を工夫することにより、英語の読解に関して有効な教材となる。Key concept は「授業の活性化、知識や教養の獲得、感性の涵養、言語に対する理解を深める」である。小泉八雲は日本の古い物語を英語で再話しており、小泉八雲というフィルターを通して英語で再話されると、もとは日本の物語が、ストーリーは同じであるものの、作品の読解としては全く異なるものとなる。たとえば、“Yuki-Onna”（「雪女」）は関東地方に伝わる雪女伝説をもとにした短編小説だが、八雲の雪女は日本の妖怪ではなく、natural sublime の擬人化、あるいはケルトの妖精となる。また、“The Reconciliation”（「和解」）は『今昔物語集』所収の小話にもとづいており、もとは仏教的な因果応報譚だが、八雲の再話ではカトリックの七つの大罪の物語へと変容する。さらに「雪女」や「和解」は小林正樹監督の『怪談』において映画化されており、映画を鑑賞し小林監督による原作の解釈を考察することにより、原作に対する理解を深めることが出来る。本発表では、こうしたことを具体的に確認したい。

第二日 — シンポジウム —

英文学と音楽／音楽性

(司会) 広島大学教授 よしなか たかし 吉中 孝志

Walter Pater の有名な言葉「すべての芸術は常に音楽の状態に向かって憧れる」(‘All art constantly aspires towards the condition of music’, ‘The School of Giorgione’, 1877) は、我々が文学と音楽との関係を考えるうえで依然として重要な立ち位置を示している。本シンポジウムでは、人間の身体的、情緒的経験に深く根差した両芸術の影響関係を英文学に軸足を置きながら、具体的な事例を挙げて検証したい。音楽／音楽性の特徴の一つであると考えられる、言葉や意味を越えた力、我々の感情に直接訴えてくる力が、どのように文学作品の中で使われているのかを共に体験したいと考えている。今回、辛うじて分析対象とすることができるのは、時代的には中世末期から初期近代、そしてロマン派の時代から 20 世紀初頭まで、ジャンルの的には演劇、詩、小説であるが、オペラや 19 世紀や現代の散文作品が抜け落ちている。言うまでもなく、アメリカ文学も抜け落ちている。このあまりに大きなテーマ設定を少しでも補完するために、フロアからの積極的な援助を期待している。

イギリス中世・初期近代演劇が音楽に求めたもの —シェイクスピアの事例を中心に—

(講師) 熊本大学准教授 とみむら のりたか 富村 憲貴

イギリス演劇はその初期から音楽と密接な関係を持ってきた。記録に残るイギリス最古の演劇は、*Quem Quaeritis* (汝らは誰を探しているのか) とされている。10 世紀にウインチェスター大聖堂で行われたこの短い典礼劇は、台詞の全てが歌であった。後のサイクル劇、奇蹟劇、道徳劇では、歌としての台詞は影を潜めるものの、宗教的な声楽曲に加えて世俗歌曲が用いられた。また、器楽曲も劇の展開上、大きな役割を占めていた。内容の世俗化が進んだインターロード、そしてシェイクスピアらが活躍した 16 世紀のエリザベス朝演劇においても、音楽は演劇の構成要素として存在し続けた。

この間のおよそ 600 年、音楽は演劇でどのような役割を果たしてきたのだろうか。これを考えるための 1 つのアプローチとして、戯曲中で音楽が用いられている文脈を基準に、使用例を分類する方法がある。一部の作品からではあるが、現在得られているデータをもとに、音楽の用いられ方が変化した部分、変化しなかった部分を検討したい。その視点から、シェイクスピアなどの作品から個別の例を取り上げ、作中での音楽の意義を考察したいと考えている。

今日の演劇においても、音楽の存在は当然のこととして受け止められているように思われる。かように音楽が演劇に必要とされ続けるのはなぜなのか。過去のイギリスの姿を見ることを足がかりに、現代の演劇と音楽の関係にも踏み込む議論ができればと考えている。

「曖昧過ぎる正解も譜面にして」ードライデンの頌歌（オード）について

よしなか たかし
(講師) 広島大学教授 吉中 孝志

聖セシリアは、音楽の守護聖人、オルガンの発明者ともされる。その祝日にイギリスでは 1683 年から音楽協会が年に一度、著名な詩人と作曲家に頌歌（オード）の製作を委託するようになった。これらの頌歌は主に二つのテーマを導く傾向にあった。一つは、世界は調和のとれた音程によって創られたとするピタゴラス的、プラトンの伝統を受け継いだ主題 (*the harmonia mundi, or musica mundans*)。もう一つは、聞く者の心を動かし、魂の様々な状態を喚起する音楽の、道徳的な力を賛美する主題 (*the musica humana*) であった。John Dryden はこの祝日のために二つの頌歌（‘A Song for St. Cecilia’s Day’ [1687]、‘Alexander’s Feast or, The Power of Music; An Ode in Honour of St. Cecilia’s Day’ [1697]）を残している。後者は、副題にあるように、人間の精神に及ぼす音楽の力についての頌歌ではあるが、英雄の劇的な場面を連ねることで構成されている。そこでは、アレクサンダー大王の宮廷に仕えた神秘的な音楽家ティモテウスが、純粋な感情だけではなく、歴史上の人物や神話を出現させる力を持っている。それを考えると、この頌歌が音楽と詩の両方を褒めたたえるためのものであったことは否定できない。しかし、本発表では、音楽との一体性を示すかに見えるこのドライデンの頌歌が、諷刺性を有した疑似英雄詩でもあるという側面を強調しながら、Handel のような作曲家によって音楽化されることによって、かつて T. S. Eliot が 17 世紀に起こったと述べた「感性の分裂」（‘a dissociation of sensibility’）の具体例を提供している可能性を論じたい。

さらに歌い継がれるキーツの「つれなき美女」 ー合唱曲に翻案された事例とその意義

こばやし ひでみ
(講師) 茨城大学教授 小林 英美

イギリス・ロマン派詩人ジョン・キーツは 1821 年に夭折したが、その名声は死後約 20 年を経ってから高まった。詩集と伝記が出版され、文壇では詩人ロバート・ブラウニングによって再評価され、画壇においてはラファエロ前派のウィリアム・ホルマン・ハントらによってキーツ作品が主題にとりあげられた。

音楽界においては、アイルランド系作曲家チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード(1852-1924)の 1877 年に発表されたピアノ伴奏の歌曲「つれなき美女」を端緒として、キーツの名声の拡大に連動するように、彼の詩は採用されるようになっていく。スタンフォードの事例については拙論「歌い継がれる「つれなき美女」」で論じているので、本シンポジウムでは、スタンフォードのライバルであるイングランド系作曲家サー・チャールズ・ヒューバート・ヘイスティングス・パリー (1848-1918) が、スタンフォードの約 30 年後に作曲した混声合唱曲「つれなき美女」(1914 年) の事例をとりあげる。

パリーはスタンフォードと同じくロンドン王立音楽院で教鞭をとりながら、活発な創作活動をしており、歌曲や合唱曲では 16 世紀から 19 世紀まで幅広く詩を利用している。彼の「つれなき美女」はブリストル・マドリガル協会の依頼で最晩年に作曲したものであった。本発表はその翻案の意義をスタンフォードとの比較と時代背景をふまえて考察するものである。

ジェイムズ・ジョイス—音楽としての言葉、言葉としての音楽

(講師) 愛知教育大学教授 どうき かずひろ
道木 一弘

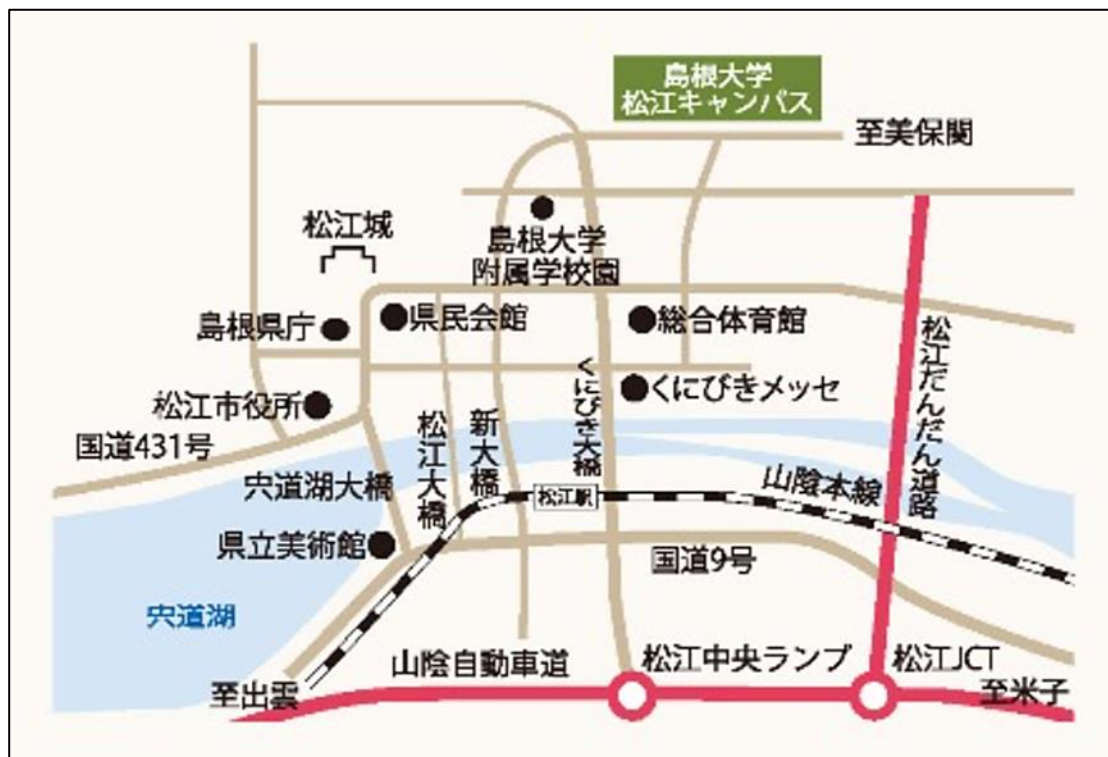
ジョイスと音楽のかかわりは、主に次の5つの観点が考えられる。(1) 伝記的レベル、(2) 音楽作品へのアリュージョンおよび間テクスト性、(3) 言葉による音楽の描写、(4) 言葉による音楽(形式)の再現、および、(5) 言葉そのものの音楽性の探求、である。シンポジウムでは、主に(4)と(5)の観点から、初期の短編集『ダブリンの人々』に収められた「二人の伊達男」を、また代表作『ユリシーズ』から第11挿話「セイレン」を取り上げ分析する。特に「セイレン」においては、言葉による音楽性の探求が顕著であり、先行研究の蓄積も豊富であるが、ジョイスの試みが成功したか否かについては未だ見解が分かれている。大きな原因は、ジョイス自身がこの挿話を「フーガの技法」によって構成したとするにもかかわらず、その意味するところが必ずしも明確ではないからである。はたして、ジョイスは何をやろうとしていたのか。音楽と言葉をめぐるジョイスの実験的試みを考察するとき、我々は、自明なものとして見なしがちな両者の境界についてあらためて考えさせられる。あるジョイス研究者は音楽を言葉から区別する特徴として、ポリフォニー、メロディ、リズム、指示対象の不在を挙げるが、シンポジウムではジョイスの作品が我々に投げかける謎を一つの契機として、音楽と言葉の関係性についても議論できればと考えている。

— 交通案内 —

大学所在地

〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

TEL : 0852-32-6100



大学への主な交通機関

JR 松江駅からのアクセス

*松江市営バス

北循環線内回り 島根大学前下車 所要時間約 15 分

島根大学・川津行 島根大学前下車 所要時間約 20 分

*一畑（いちばた）バス

美保関（みほのせき）ターミナル行 島根大学前下車 所要時間約 20 分

マリンプラザしまね行 島根大学前下車 所要時間約 20 分

*タクシー

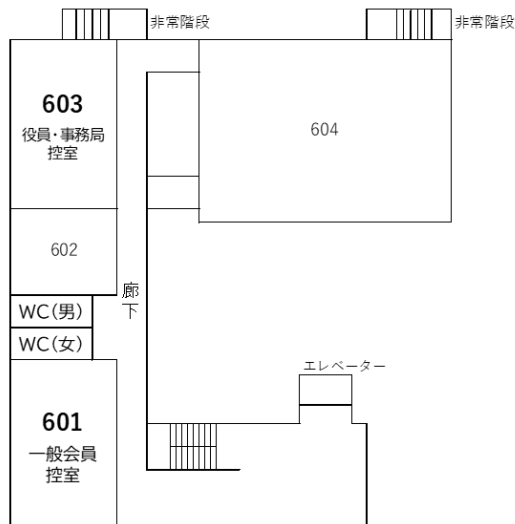
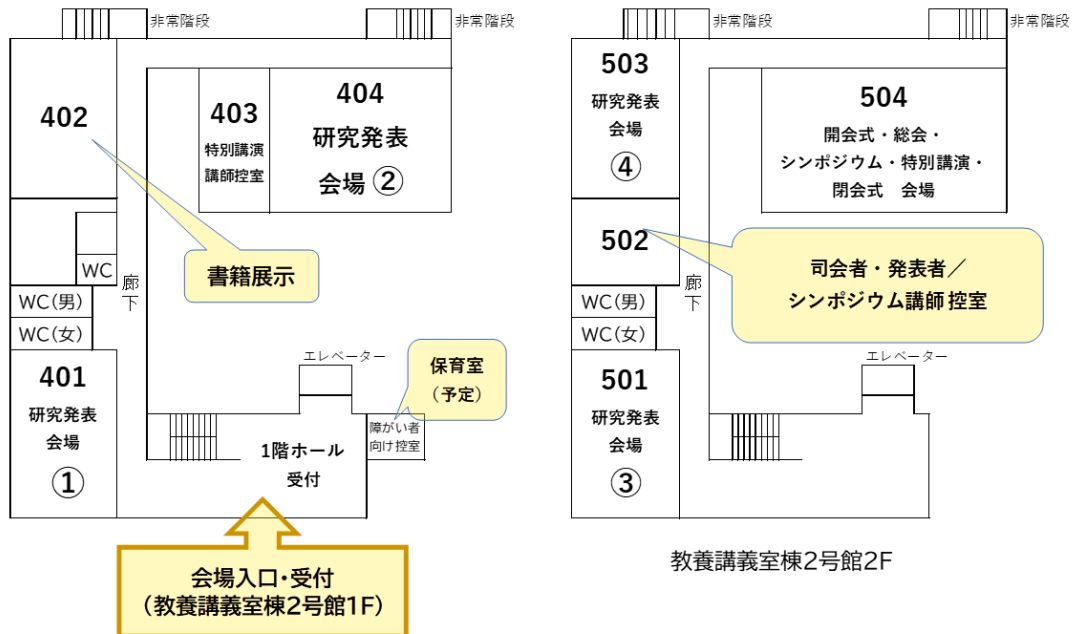
所要時間約 10 分

— 建物配置図 —

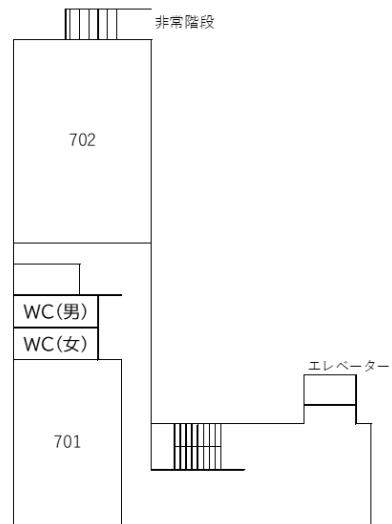


— 建物配置図 —

教養講義室棟2号館内配置図



教養講義室棟2号館3F



教養講義室棟2号館4F

— 会場のご案内 —

受 付	教養講義室棟 2号館1階	1階ホール	研 究 発 表 会 場		
書籍展示場	教養講義室棟 2号館1階	402 教室	第1室	教養講義室棟 2号館1階	401 教室
開会式・総会 閉会式	教養講義室棟 2号館2階	504 教室	第2室	教養講義室棟 2号館1階	404 教室
特別講演	教養講義室棟 2号館2階	504 教室	第3室	教養講義室棟 2号館2階	501 教室
シンポジウム	教養講義室棟 2号館2階	504 教室	第4室	教養講義室棟 2号館1階	503 教室
司会者・発表 者・シンポジ ウム講師控室	教養講義室棟 2号館2階	502 教室			
特別講演 講師控室	教養講義室棟 2号館1階	403 教室			
一般会員控室	教養講義室棟 2号館3階	601 教室			
役員・事務局 控室	教養講義室棟 2号館3階	603 教室			
保 育 室	教養講義室棟 2号館1階	障がい者 向け控室			

— 懇親会のご案内 —

開始時間： 午後6時30分

会 費： 6,800円

会 場：松江エクセルホテル東急

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。